

## 真新しい木肌の「伊勢神宮」を参拝しました



去る13年10月末に伊勢神宮の外宮と内宮を参拝しました。

**外宮**（豊受大神宮）：秋晴れの朝日の中を第一、第二大鳥居をくぐり朝露に濡れた砂利道の左側を踏みしめながら歩いていく。鬱蒼とした杉木立の中に苔むした神社が目に入る。その先には、真新しい木肌色の外玉垣南御門の前に人だかり。私たちもその人波の後ろに並び、少しずつ前に進む。朝日を浴びた削り出したばかりの檜で造られた参拝所に近づき二礼二拍手一礼する。押されるように脇により板格子の扉越しに白玉石敷きに内玉垣南御門が建ち、その奥に御正殿の屋根部が神々しく起立している。その前では、お祓いを受ける家族が白装束を身に着けた神主の前に恭しく頭を下げていた。

御正殿は四重にも囲った板垣と玉垣の中にあり、ふっくらとした地形状のところにその建物は鎮座していた。青空の下、白い玉砂利、金色に光る千木と堅魚木、光輝く檜の地肌の色彩が眩しい空間に感銘を受けました。白木の美しい御正殿を後にし風の宮を拝観、そして多賀宮を遠目に拝観したのち参道を通りツアーバスに乗り込みました。



**内宮**（皇大神宮）：バスが内宮近くの駐車場に到着、下車し案内人から参道は右側通行とのこと。外宮とは反対側を通行とのこと、なぜでしょう？

ここで少し参拝客が増えてきました。第一番目の宇治橋鳥居をくぐり五十鈴川に掛かる宇治橋を渡る。冬至の日の前後では、朝日とこの鳥居そして宇治橋とが一直線になるというから東南南に配置されている、これもレイラインか。手入れの行き届いた木々の間の湿った砂利道を歩く。案内人に朝露で濡れているのですかと質問、いいえ、神宮の人たちが参拝客のために水を撒いているそうですとのこと。

御手洗場に下りてみた五十鈴川は透き通り、川底の玉石がキラキラと美しい。まわりの小高いやさしい姿の山々に少し紅葉が色ずきだしていました。

元の参道に戻り第二鳥居をくぐるとお寺風の神楽殿の前に出る。さらに大木の杉並木の間を奥へと歩き弓なりに参道を曲がると、石階段の先に内宮御正殿の真新しい檜の門が目に入る。昇る人とともに記念撮影をする人でごったかえしている。その間を昇り御門のところまで参拝する。ここは階段の踊り的な広場しかなく後から昇ってくる人でゆっくり拝観できませんでした。

その短い時間で向かって右側に旧内宮の屋根をкаろうじて見ることができました。

石段を降り内宮の後ろにあたるところに荒祭宮があるのでそこに回る。戻る際に参道脇の五丈殿を拝観し、来るとき五十鈴川に掛かっている風日祈宮橋を渡りたいと思っていたのでそちらにまわる。

さらにその奥の鄙びた風日祈宮も拝観、また引き返して川を祭る滝祭神に寄る。バスの出発時間が迫ってきたのもと来た参道を急ぎ戻りました。

外宮内宮ともに広い境内に幾つもの神社や施設が点在しているので、それらを拝観するには少なくともそれぞれ半日は必要だと思いました。

※外・内伊勢神宮の配置図は、伊勢の神宮のHPより <http://www.isejingu.or.jp/shosai/>

## 技術伝える遷宮こそ日本文化

校正業 大村 茂

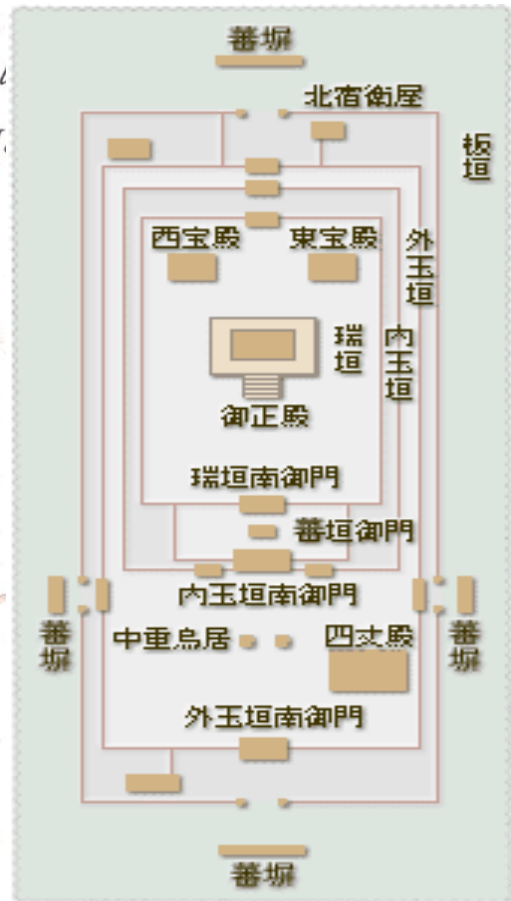
(東京都 51)

日本と西洋を比較した文化論を読んだことがある。「ヨーロッパやエジプトは石の文化で古いものを尊ぶ。日本は木の文化。何度も建て直し、古いものを大切にしない」。確かに、西洋の石造建築は耐久性がある。しかしエジプトのピラミッドにせよギリシャのパルテノン神殿にせよ、完成当時の人々が感嘆した外形や色彩は失われ、現代人は見ることができない。

それに対し日本の伊勢神宮は、建物自体は遷宮で常に新しいが、現代の私たちが目の当たりにするのも、千年以上昔の人々が見たのと変わらない唯一神明造の社殿である。何より素晴らしいのは、20年に一度の遷宮のおかげで、建築技術というソフトウエアが子々孫々、継承され続けていることだ。

「石で頑丈に造っても、この世に形あるものは必ず滅ぶ。永続できるのは、技術と思想」。これこそが古代の日本人の思いだったのではないか。

朝日新聞より



社殿の様式と配置 - 伊勢神宮のHPより

伊勢神宮を日本建築と西洋建築との違いについて説明している上記新聞記事では、建物(神殿)を構成する物質の性質と技術に視点を置いて展開している。

この点を考えてみるとその物質と技術の目的理由に大きな違いがあると思う。

西洋の、と言ってもピラミッドは為政者の墓、パルテノン神殿はギリシア神話の女神アテーナーを祀る神殿から始まりキリスト教、さらにモスクの時代に、火薬庫にと目的が変遷している。



西洋と日本との違いというより、石の建築と木の建築の持つ性格をどのように利用しているかによるのではと思うし、権力者や宗教の永遠性の効力を、自身や他者に対して重みを与えるための手段としての物質の選択だと思う。

伊勢神宮の宗教性は、海や山の自然環境を象徴化し自然崇拝を原点とした原始宗教的世界観からさらに宇宙をも含めた空間を、人々の生死も森羅万象と捉えた多神教の宗教となって民俗信仰が高度化し日本の中心的位置になったのだろう。

日本の神道(神教)は建物などの施設は重要ではなく場所が、すなわち自然空間があればそこが祈りの場となっている。

総檜の唯一神明造りの形態は、穀物倉が原点とか。平入りの切妻屋根で単純明快、20年毎の遷宮のシステムは民衆も参加し完成させる総合性の仕組みで壮大。すがすがしい感じを与える建物、それは人の気持ちを素直にさせる。キリスト教の教会や日本のお寺などの圧倒する形態や上からの説教の気配は少ない。

その拝観に際して、杉木立や檜の扉に囲まれ、その中にある正殿の金色の千木や鯉木などに光を受けた輝くその空間は、眩しいばかりの自然、森羅万象の場にふさわしいところでした。